

日本映画の英語字幕における訳出要因について

—制作プロセスと視聴者に着目して—

篠原有子

(立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士課程後期課程)

*In recent years, the demand for English subtitles of Japanese films has increased with the increase of Japanese films aimed at overseas markets. However, since English subtitles of Japanese films have not attracted much attention in academic research, only a few investigations have been conducted regarding the translation and translation process of English subtitles. This paper intends to explore factors that influence the translation of English subtitles of Japanese films from the viewpoint of subtitling process and audience. The analysis of translation of culture-specific items (CISs) of the film *Sen to Chihiro no Kamikakushi* reveals that more than half of the CISs in the film are 'standardized' in English subtitles. This can be attributed to the diversity of audiences of English subtitles, and to the process of internationalization in localization model. Further research is needed to see if this tendency is applicable to English subtitles of other Japanese films, and to examine factors in the target culture that influence the translation of Japanese films.*

1. はじめに

日本で制作される映画字幕には、外国映画に付けられる日本語字幕、日本映画に付けられる外国語字幕、およびアクセシビリティ (accessibility) に配慮した取り組みとしての言語内翻訳 (intralingual translation) である聴覚障害者用字幕 (SDH)¹がある。本稿では映画産業における英語の優位性に鑑み、外国語字幕の中でも英語字幕を扱うが、映画字幕としての日本語字幕と英語字幕は、どちらも映画という多元的なメディアを起点テキストとする視聴覚翻訳 (Audiovisual translation = AVT) であり、音声言語から書記言語への変換を伴う言語間翻訳 (interlingual translation) である。また、時間と空間の制約のもとでの訳出であること (Díaz-Cintas & Remael, 2007)、それらの制約を乗り越えるために様々な方略が用いられること (Gottlieb, 1994) なども共通してい

SHINOHARA Yuko, "A study of Factors That Affect Translation of English Subtitles of Japanese Films: Focusing on Subtitling Process and Audience," *Interpreting and Translation Studies*, No. 14, 2014, pages 97-114. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

る。しかし相違点もある。日本語字幕が主に外国映画を鑑賞する日本国内の視聴者に向けて制作されるのに対して、英語字幕は国内において限定的に視聴される場合を除けば²、主に日本映画を見る海外の視聴者に向けて作られるという点である。したがって英語字幕がターゲットとする視聴者は視聴人口規模が大きく、その社会文化的背景も多様であると考えられる。また、目標文化によっては、英語字幕を基に重訳が行われることも多い (Díaz-Cintas, 2009)。こうした点を踏まえて、本稿では英語字幕の制作プロセスに着目し、制作プロセスの観察を通して英語字幕の訳出傾向とその作用要因を探る。この目的を達成するために、事例研究として日本映画『千と千尋の神隠し』における異文化要素 (日本的有標性) の訳出を分析し、制作プロセスと訳出の関係を探っていく。制作プロセスの視点から英語字幕の訳出を分析することにより、海外マーケットという世界的なコンテキストや、制作プロセスにおける参加者の関与が浮かび上がってくる。

本稿の構成は次のようになっている。まず、英語字幕制作状況の日本における変化と、世界における英語字幕一般に関する研究を概観したのちに、日本映画の英語字幕制作プロセスを提示し、本研究における考察で適用する「標準化 (standardization)」と「国際化 (internationalization)」という概念について述べる。次に、日本映画『千と千尋の神隠し』の英語字幕に含まれる異文化要素を抽出したのちに、翻訳方略³を同定し、訳出傾向を探る。この結果を踏まえて、英語字幕の制作プロセスと訳出傾向との関係性を、標準化と国際化の概念で考察し、最後に今後の研究課題について述べる。なお、これ以降は特に言及がない限り、本研究における「英語字幕」とは日本映画に付けられる英語字幕を指すものとする。

2. 日本における英語字幕制作

ゴットリーブ (Gottlieb, 2004, p. 86) は字幕翻訳を「映画メディアにおいて目標言語と異なる言語で提示される音声メッセージを翻訳し、1~2行の書記言語という形態によって、オリジナル音声と同期させて画面上に提示するもの」と定義する。この字幕翻訳が日本に導入されたのは 1931 年に上映されたアメリカ映画『モロッコ (Morocco)』(スタンバーグ監督, 1930) からであるが (田中, 1976II, p.216)、それ以来、日本では子供向けの作品を除いてほとんどの外国映画が字幕付きで上映されてきた。この傾向は現在まで続いていて、2011年に公開された外国映画(384本)では、字幕 346本、吹き替え版 8本、吹き替え版有 30本 (社団法人外国映画輸入配給協会) と、字幕での上映が圧倒的に多くなっている。その一方で、年齢層にかかわらず近年は吹き替えを望む声が増えているとする指摘もあり、その要因として 3D 上映では字幕が読みにくいこと、ハリウッド作品の映像切り替えのテンポが速くなり、字幕が見づらくなったことなどが挙げられている (朝日新聞, 2012)。

では、もう一方の字幕である日本映画の英語字幕の制作状況はどうだろうか。日本語字幕と比べて英語字幕についての情報はきわめて乏しく、字幕を付けた映画の

タイトルや制作本数は明らかではない。日本映画の輸出に関しても、日本映画製作者連盟が年間の日本映画の輸出実績を公表しているものの、情報の範囲は連盟加盟4社（松竹、東宝、東映、角川）とそのグループ会社が日本映画関連の権利（映画・テレビ映画の海外配給権、海外上映権、リメイク権など）を利用して得た収入（2012年：5299万7000ドル）（日本映画製作者連盟資料）に限られている。とはいえ、近年になって日本映画を取り巻く環境が変化し、「生き残りをかけて、海外に出ていくことも考えなければならない」（掛尾，2009，p. 14）状況に直面していることから、英語字幕を付ける日本映画は増えていると思われる。

英語字幕の存在は、少なくとも1951年に『羅生門』（黒澤明監督，1950）がヴェネチア国際映画祭でグランプリを獲得した頃にまで遡ることができる。同作品の受賞を契機に、日本映画の国際映画祭への出品が活発化し、1952年には3つの国際映画祭に日本映画16本が出品された（田中，1976IV，p. 14）。当時、『羅生門』にはイタリア語の字幕が付けられたが（田中，1976III，p. 322）、今日では「映画を世界に売るためには英語は必須の言語」（Palleta, 2012）であることから、国際映画祭やフィルムマーケット（映画の見本市）への出品に当たって英語字幕を付けることが要件となっている。日本在住の英語字幕翻訳者イアン・マクドゥーガルは、上映される日本映画の9割は英訳されているだろうと語り（膳所，2011）、その理由について次のように述べている。

邦画英訳された映画全てが海外で上映されるわけではなく、国際映画祭での上映や、海外に売れることを視野に入れた時点で英訳が必要になりますよね。まず英語字幕を入れてフィルムマーケットに持って行き、バイヤーが各国に売り込みをします。ですから思っている以上に邦画は英訳されています。（*ibid.* p. 78）

英語字幕が増えている背景の一つには、日本映画の国内市場が厳しさを増していることがある。2006年、日本映画は21年ぶりに外国映画の公開本数を上回った（海外映画輸入配給協会）。しかし、本数が増えても収益が思うように伸びない状況の中で、映画会社は「生き残り作戦」として海外展開を図っており、それが英語字幕増加の要因となっている（朝日新聞，2010年2月）。英語字幕に対する需要や関心の高まりは、ウェブ上で開催される「オンライン字幕コンテスト」（アルク、日本映像翻訳アカデミー共催）において、従来からの日本語字幕部門に加えて、数年前に英語字幕部門が設置された⁴ことから窺える。

3. 非英語映画の英語字幕に関する研究

このように日本では英語字幕の制作が増えているが、これは日本に限ったことではないだろう。今日、世界的に浸透している映画やテレビドラマの多くはハリウッド製であり、英語が主たる言語である作品が多い（Diaz-Cintas, 2009, p. 10; Gottlieb,

2009, p. 21)。しかし、映像作品の制作は世界各地で行われており、国際映画祭やフィルムマーケットには、英語以外の言語を使用した作品（非英語映画）も多数出品されている。例えば 2014 年のベルリン映画祭では、コンペティション部門に選出された 23 作品のうち、非英語映画は 18 本（うち 3 本は英語を含む多言語作品）、英語映画は 5 本である（*Berlinale Journal*, 2014, pp. 12-28）。また、2014 年のカンヌ映画祭では、コンペティション部門に選出された 18 本のうち、非英語映画が 10 本、英語映画が 8 本となっている⁵。非英語映画を出品するには英語字幕を付けなければならないため、フィルムマーケットへの出品のための英語字幕も併せると、かなりの数の英語字幕が作成されていると考えられる。しかし英語文献を見る限り、非英語映画に付けられる英語字幕への学術的な注目度は高いとは言えず、英語字幕を扱った研究は少ない。例えば、*John Benjamins Translation Studies Bibliography* における字幕研究（subtitling）の論文を見てみよう。字幕の訳出に関する最新の研究 10 本（2012 年から 2014 年）を見ると、英語を起点言語とする事例がほとんどで、英語を目標言語とする研究は 1 本のみである。これらは英語字幕を目標テキストとする論考が少ないことを示すものである。字幕について言語的、記号的、社会的領域から実務面にいたるまで詳細に記述しているディアズ＝シントスとリマエル（Díaz-Cintas & Remael, 2007）においても、非英語映画の翻訳に関する記述は少ない。わずかに視聴覚翻訳における言語（文化）間の優位性（balance）に関して言及する中で、マイナーな言語（lesser-spoken language）の映画においては、英語に訳されたテキストを基に目標言語の字幕が制作される場合があることに触れ、そうしたケースでは複雑な問題が生じると述べるにとどまっている（*ibid.* p. 38）。

日本における英語字幕の研究としては、『となりのトトロ』（宮崎駿監督，1988）の英語字幕（井上，1999）、『千と千尋の神隠し』（宮崎駿監督，2001）の英語吹き替え（山田，2004）、『たそがれ清兵衛』（山田洋次監督，2001）の英語・スペイン語字幕（矢田，2013）などの論考があるものの、その数は限定的である⁶。一方、海外ではハティムとメイソン（Hatim & Mason, 1997）による英語字幕におけるポライトネスを扱った論考や、ギリシャ映画の英語字幕におけるポライトネス（Gartzonika & Serban, 2009）、台湾映画の英語字幕における訳出（Lu, 2010）、フランス映画とスペイン映画における英語字幕の違い（Morris, 2009）などがある。これらの研究は、原文と英語字幕のシフト、翻訳方略、訳出傾向について論じているが、訳出に作用する社会的な要因についての議論が十分になされているとは言い難い。映画字幕が翻訳者との相互作用の産物であること（Díaz-Cintas & Remael, 2007; 篠原, 2011）を考えると、目標テキストが制作されるまでのプロセス、視聴者層など、社会的なコンテクストを含めた考察が必要である。そこで本稿は、英語字幕の制作プロセスと視聴者に着目することとし、次項においてこの 2 つの観点から英語字幕の特性を明らかにする。

4. 英語字幕の特性

日本映画に付けられる英語字幕の制作プロセスは、作品、制作会社、制作スケジュールなどによって異なるが、概ね以下のような流れになっている。

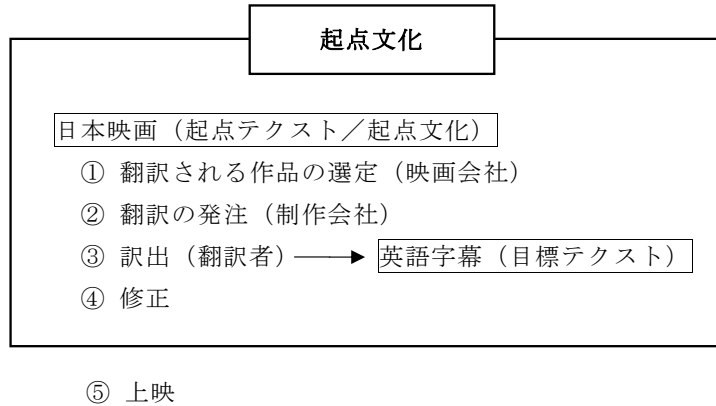


図1. 英語字幕の制作プロセス

図1が示すように、日本映画に付けられる英語字幕の制作プロセス（①～⑤）では①～④までが起点文化（日本）の中で行われる。具体的に言うと、翻訳されるテキストの選定、訳出、字幕テキストの修正など、目標テキストの制作に関わる工程がすべて起点文化の中で実行されているのだ。このことから、日本映画に付けられる英語字幕は起点主導（source-driven）で行われる翻訳であるといえる。これがなぜ英語字幕の特性といえるのかというと、日本語字幕も含めて、日本における出版翻訳は目標主導（target-driven）で行われる翻訳だからである。場合によっては海外在住の翻訳者が翻訳を行うこともあるが、そうしたケースでも制作のイニシアチブを取るのには目標文化の出版社であることから、やはり目標主導と言っていいだろう。例えば、英語の原著が日本で出版翻訳される場合を考えてみよう。この場合、日本の出版社（目標文化）が原著を輸入し、翻訳者が訳出し（目標文化）、日本（目標文化）で翻訳物が出版されるというように、目標文化において目標テキストが制作される。つまり、目標主導で翻訳が行われるのである。しかし前述のとおり、日本映画に付けられる英語字幕では、起点文化において目標テキストが制作されるという起点主導による翻訳である。そのため英語字幕の訳出には、日本映画が受容される海外の諸地域（目標文化）の社会的コンテキストだけでなく、日本（起点文化）における制作プロセスも作用すると考えられるのである。

制作プロセスに関して重要なのは、日本語から翻訳された英語字幕を基にして他言語の字幕を作る重訳（indirect / relay translation）⁷が行われる場合があるという点である。重訳は起点言語が非英語のときに行われることがあるが（Grigaraviciute &

Gottlieb, 1999; Zilberdik, 2004)、このときの英語字幕を起点テキストと目標テキストの中間バージョンと捉えることができる。つまり、海外マーケットを視野に置くと、英語字幕を次のような3段階のプロセスに位置づけることができるのだ。

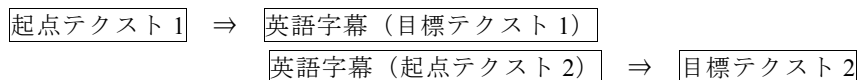


図2. 海外マーケットにおける英語字幕の位置

さらに、英語字幕が中間的位置にあることがその訳出方法に影響し、目標テキストの訳出を考慮した中間的な訳を生み出すことになるのではないかと考えられる。

英語字幕の二つ目の特性としては、視聴者の多様性が挙げられる。この点は日本語字幕の視聴者と比較すると明らかである。日本語字幕が主に日本語母語話者の視聴者を対象にしているのに対して、英語字幕は国際映画祭の審査員や観客、フィルムマーケット（映画の見本市）のバイヤー、世界各地の視聴者に向けて作られている。このことから英語字幕が対象とするのは、英語を母語としない人も含めた、言語的、文化的に極めて多様な背景を持った視聴者と考えられる。このことは字幕の訳出に何らかの影響を及ぼすと思われる。また前述した重訳という行為も、起点言語も英語も理解しない視聴者に起点テキストを届けるための方策であることから、視聴者の多様性がもたらす英語字幕の特性の一つと考えていいだろう。ここまで、起点主導の翻訳および視聴者の多様性という英語字幕の特性を示した。次項ではこの特性と訳出の関係性を考察するための概念について述べる。

5. 標準化と国際化

本項では、英語字幕における訳出傾向を探るための概念として「標準化 (standardization)」およびローカリゼーションにおける「国際化 (internationalization)」について述べる。

5.1 標準化

標準化 (standardization) に関する代表的な論考としてはトゥーリー (Toury, 1995) とベイカー (Baker, 1993, 1996) がある。トゥーリー (ibid. pp. 267-274) は翻訳の「法則 (laws)」の一つとして「標準化進行の法則 (the law of growing standardization)」を提案し、次のように標準化を説明している。

翻訳ではオリジナルで生起しているテキスト的諸関係がしばしば変更され、時には全くと言えるほど無視され、目標言語から提供される (より) 習慣的な選択肢が好まれる場合がある。(Toury, 1995, p. 268)

本稿においてはトゥーリーによる「標準化 (standardization)」の概念を使用する。標準化の概念が翻訳の記述的研究 (Descriptive translation study: DTS) の枠内で論じられているからである。この点はトゥーリーが、自身の主著である *Descriptive translation studies –and beyond* (Toury, 1995) の中で標準化を取り上げていることでも明らかである。すなわち、トゥーリーは社会的コンテクストを考慮しつつ標準化について論じているのであり、このことは、訳出に作用する社会的コンテクストを探るという本研究の目的に合致するものである。

「標準化 (standardization)」と似た概念としてベイカー (Baker, 1993) の「翻訳の普遍的特性 (translation universals)」における「正常化 (normalization)」(Baker, 1996, pp. 176-177) の論考がある。しかし、ベイカーの論考はコーパスベースの研究に基づくものであり、社会的コンテクストを考慮したものではないことから、様々な参加者が関わる英語字幕の訳出を考察するには適さないと考える。ゆえに本稿ではトゥーリーの「標準化」の概念を採用することとする。また、本稿では標準化を「法則」ではなく、日本映画に付けられる英語字幕という限定的なコンテクストにおける訳出傾向として捉える。トゥーリーは標準化を翻訳の「法則」としているが、実際には「目標文化のシステムの中で翻訳が弱く、周辺的な地位にあるとき」(マンデイ, 2009, p. 177) という条件付きであり、標準化の度合いにも違いがある (Kenny, 2001) とされるからである。

トゥーリーによる定義を字幕翻訳に当てはめるならば、標準化とはオリジナルの台詞が持つ言語的特徴を弱めたり、消し去ったりすることによって、目標文化において馴染みのある表現を用いた字幕ということになる。一般的に字幕翻訳は、媒体の持つ制約によって起点テキストが持つ要素が失われやすい傾向があるとされる (Díaz-Cintas & Remael, 2007) ことから、日本映画の英語字幕においても標準化が行われていると考えられる。

5.2 ローカリゼーションにおける国際化

ここではローカリゼーションにおける「国際化」について説明したうえで、なぜ国際化が英語字幕の制作プロセスと訳出の関係性を考えるうえで有用なのかについて述べる。まず、用語から説明しよう。ローカリゼーションと国際化については、ローカリゼーション業界標準協会 (Localization Industry Standards Association, LISA) が以下の定義を提案している。

ローカリゼーションとは、ある製品をそれが使用され販売される目標ロケール(国・地域と言語)にとって、言語的かつ文化的に適切なものにするものである。
(WordPress)

国際化は、製品を一般化するプロセスで、それにより、再設計をすることなく複数の言語・文化的習慣に対応することができる。国際化は、プログラムの設計や製品開発、および製品の添付文書作成の段階で行われる。(ibid.)

2つの定義からわかるように、ローカリゼーションという用語はテキストよりも製品について述べることが多い。そのため、ローカリゼーションには翻訳を含む場合とそうでない場合があるのだが、本稿では英語字幕を扱うことから、翻訳を含むローカリゼーションが対象となる。翻訳を含むローカリゼーションと国際化の工程は、次のように図式化できる。



図3. 「翻訳+ローカリゼーション」のモデル (ピム, 2010, pp. 206-207 に基づいて筆者が作成)

この図は、翻訳を含む製品を海外マーケットに出す場合には、一旦起点テキストを国際化し、そののちに国際化されたテキストを基に各言語に訳出するという、「翻訳+ローカリゼーション」モデルを示す。このモデルにおける国際化は各目標テキストの産出を容易にするための中間バージョンといえるもので、「国際化が整えば、ローカリゼーションの作業は起点テキストを参照せずに国際化バージョンから直接行えるようになる」(ピム, ibid. p. 207)。

このプロセスは前述した国際マーケットにおける英語字幕の制作プロセス(図2)と共通している。つまり、日本語の台詞→英語字幕→目標言語、という流れである。したがって、英語字幕を図3の中間点である国際化のプロセスに位置づけることができ、英語字幕が国際化(各目標テキストの産出を容易にするような訳出)されたテキストになっているのではないかという仮説が成り立つ。なお、図3にあるように「翻訳+ローカリゼーション」モデルでは、国際化は起点言語で行われるとされることから、英語字幕は国際化に相当しないと見る見方があるかもしれない。しかし、起点言語ではないものの、国際化された製品と同じ働き(多言語翻訳への仲介役)をすることから、英語字幕を国際化されたテキストとみなすことができると考える。

6. 研究方法

日本映画の英語字幕における訳出傾向を探ることを目的として、日本映画『千と千尋の神隠し』の異文化要素の訳出にどのような方略が採用されているかについて

分析を行う。まずは以下において、対象作品の選択理由と、分析の枠組みとなる方略分類について述べる。

6.1 対象作品について

分析の対象とする日本映画は『千と千尋の神隠し (Spirited Away)』(宮崎駿監督, 2001) (US 版 DVD、英語字幕付き) である。同作品は第 52 回ベルリン国際映画祭金熊賞、第 75 回アカデミー長編アニメ賞を受賞するなど、海外でも高い評価を得た作品である。また、2002 年に全米 714 館で公開されたことに加え (フィールドワークス, 2008, p. 72)、世界 74 地域でリリースされている (Internet Movie Database: IMDb)⁸ ことから、多くの海外視聴者に受容されている作品と考え、分析対象として選択した。なお同作品の英語吹き替え版はディズニー社によってアメリカで制作されたが、英語字幕はスタジオジブリによって日本国内で制作されたものである⁹。

6.2 異文化要素の領域と英語字幕のための方略分類

前述のように、一般的に字幕翻訳では、媒体の持つ制約から起点テキストの持つ特異性が失われることが多いとされる。これが標準化につながるのではないかとの仮説の下に、本稿では英語字幕における文化の標準化に着目して、日本映画に付けられた英語字幕を分析する。具体的には、篠原 (2013) の論考に基づいてペダーセン (Pedersen, 2011) の方略分類に修正を加え、日本語から英語への訳出に適すると思われる修正版の分類を提示したうえで、その方略分類に従って英語字幕を分析する (修正版については分析の項で示す)。そして、異文化要素の訳出に使用された方略を同定した後に、英語字幕において標準化が行われているかどうかを検証する。

異文化要素が何を指すのかについて、ペダーセン (Pedersen, 2011, p. 43) は「文化的言語表現による言及であり、言語外の存在物やプロセスと関係するもの」と定義し、異文化要素は度量衡、料理、文学など 12 領域に存在するとしている。研究によっては、デービーズ (Davies, 2003, p. 69) のように、異文化要素はそれ自体として存在するのではなく、「起点文化と目標文化の間に生じる衝突 (conflict) の結果として生じる」(Aixelá, 1996, p. 57) ものであるため、「直観的に認識できる (intuitively recognizable)」として定義を避ける論考もある。これは、「文化の冰山モデル」(Katan, 2004, p. 43) が示すように、文化という概念が建築物、芸術品、制度など表面的なものだけでなく、内面化された価値観や規範意識をも含む広義のものであるため、すべての言語ペアに共通の異文化要素はないという考えによるものかもしれない。しかし、分析には何らかの指針が必要であり、具体的な領域を提示することは異文化要素の観察と抽出を助けると考え、篠原 (2013) と同様に、ペダーセンが提示する 12 領域を参考にして分析を行う。ただし人名に関しては、すべての固有名詞が異文化要素とは限らないとするデービーズ (Davies, 2003, pp. 71-72) の論考に倣い、異文化要素の範囲を絞り込んで、人物の属性を示すもののみを異文

化要素とする。

分析の枠組みには、『おくりびと』における異文化要素の分析（篠原，2013）で用いられた方略分類（Pedersen, 2011）を修正し、新たな分類を使用する。同論文ではペダーセン（ibid.）の方略分類に関して次のような課題が指摘されていた。すなわち、1）起点テキスト（日本語）をそのまま提示する「保持（Retention）」の方略が英語字幕では採用が困難であること、2）各方略（保持、詳述、直接訳、一般化、置換、省略、公的等価）の境界が明確でないこと、である。そこで、これらの課題点を解消するためにいくつか変更を行った。それが、1）使用が困難であった「保持」に替えて、「音訳（Transliteration）」を導入する、2）「注釈（Annotation）」（創作による注釈の付加）という方略を新たに加える、3）「公的等価（Official equivalence）」を「置換（Substitution）」に含める、の3点である。これらの変更を加えて作成した修正版の方略分類と訳出例を以下に示す。

1 音訳（Transliteration）	英語化された語も含む	着物→kimono
2 詳述（Specification）	目標言語による情報の追加	法隆寺→Horyuji-temple
3 直接訳（Direct translation）	逐語的な訳	八百万の神さま→8 million gods
4 一般化（Generalization）	同一カテゴリ内の上位語	くぐり戸→gate
5 置き換え（Substitution）	「公的等価」を含む度量衡	袴→trousers
6 注釈（Annotation）	創作による情報の追加	People pray to them.
7 省略（Omission）	異文化要素の削除	リンさん→Lin

表 1. 英語字幕のための方略分類（Pedersen（2011）を修正したうえで筆者が作成）

この表では方略が1から7に向かって、起点テキストの持つ異文化要素が低減された訳出となる。すなわち、音訳（1）を使った場合は異文化要素が最も保持された訳に、省略（7）を使った場合は異文化要素が完全に削除された訳になるということである。以上を踏まえて、次では『千と千尋の神隠し』における異文化要素の訳出には、これらの方略がどのような頻度で採用されているのかを見て行く。

7. 分析

日本のアニメ映画『千と千尋の神隠し』は、10歳の少女千尋が両親と引っ越し先の家に向かう途中、不思議な町に迷い込んでしまうところから始まる。町に入った

両親は町の掟を破ったために豚にされてしまい、一人残された千尋も、町を支配する魔女、湯婆婆（ゆばーば）に名前を「千」と変えられ、湯屋で働くことになる。湯屋で働く間に千尋は様々な困難に直面するが、リン、釜爺（かまじい）、腐れ神、顔無し、銭婆（ぜにーば）らとの出会いや、ハクとの友情を通して、生きる力を手に入れるという冒険ファンタジーである。この作品の上映時間は125分、その中から29の異文化要素を抽出した。なお、分析に使用したUS版DVDには字幕翻訳者の名前は表示されていない。

最初に、対象作品におけるキャラクター名の訳出について説明する。『千と千尋の神隠し』の主なキャラクターは15体であるが、そのうち呼び名があるのは、千尋（千）、お父さん、お母さん、ハク（コハク、ニギハヤミコハクヌシ）、リン、湯婆婆、坊（湯婆婆の子供）、釜爺、銭婆、腐れ神（御腐れ様）、顔無しの11体である。ちなみに、坊は「Baby」、顔無しは「No Face」、腐れ神は「Stink God」というように直接訳が採用され、他のキャラクターはChihiro (Sen)、Haku (Kohaku)、Lin、Yubaba、Zeniba、Kamajiと、音訳で提示されている。前述したように、人物名に関しては、その人物の属性を含意するものを異文化要素として分析の対象とする。例えば、上に挙げたキャラクターの中では、「ニギハヤミコハクヌシ」という名が日本の古代の神を連想させるものであることから、この名前を異文化要素とした（映画の中にも、この名前を聞いた千尋が「神さまみたいな名前ね」と言うシーンがある）。

上記を踏まえて『千と千尋の神隠し』における異文化要素を抽出し、起点テキスト、目標テキスト、そして訳出に使用された方略を示したのが表3である。同じタイプの訳出が複数回見られる場合は、その中の1つを記述し、採用した方略の右にトークンの出現回数を記した。なお、実際の英語字幕ではピリオドは使用されていない。

起点テキスト

- ・ ほら、あれが小学校だよ。
- ・ 石の祠。神様のおうちよ。
- ・ 釜爺さんですか。
- ・ ハクさま
- ・ 騒ぎが静まったら
裏のくぐり戸から出られる。
- ・ 右手のお座敷でございます。
- ・ 八百万の神様たちが
- ・ 疲れをいやしに来るお湯屋
なんだよ。

目標テキスト

- Chihiro, there's the school.
- They're shrines.
- People pray to them.
- Um, are you Kamaji?
- Master Haku!
- When things quiet down,
go out by the back gate.
- Your room is on the right.
- It's a bath house,
- where 8 million gods can
rest their weary bones.

翻訳方略

- 一般化
- 置き換え
- 注釈
- 省略 (6)
- 直接訳
- 一般化
- 一般化
- 直接訳
- 直接訳

- | | | |
|--------------------------|--|----------|
| ・ <u>腹掛け</u> 。自分で洗うんだよ。 | You wash your own <u>apron!</u> | 置き換え |
| <u>袴</u> 。 | <u>Trousers!</u> | 置き換え |
| ・ 一回 <u>薬湯</u> 入れなきゃだめだ。 | This tub needs an <u>herbal soak</u> . | 直接訳 (3) |
| 千、 <u>番台</u> 行って札もらって | Get a tag from the <u>foreman</u> . | 置き換え (4) |
| きな。 | | |
| ・ 春日 <u>さま</u> 。 | For Kasuga <u>sama</u> | 音訳 |
| ・ <u>ヨモギ湯</u> ですね。 | Oh, ...A <u>fragrant bath</u> coming up. | 一般化 |
| どうぞごゆっくり。 | Relax and enjoy... | |
| ・ 今日 <u>は一本</u> つけるからね。 | <u>Sake's</u> on the house, tonight! | 置き換え+音訳 |
| ・ お父さん、お母さん、川の | Mommy, Daddy, the River God | |
| 神様からもらった <u>おだんご</u> | gave me this <u>cake</u> . | 置き換え |
| だよ。 | | |
| ・ <u>えんがちよ</u> 。千、えんが | <u>Gross, gross</u> , Sen! | 置き換え |
| ちよ。 | Totally gross. | |
| ・ 私の本当の名は | My real name is | |
| <u>ニギハヤミコハクヌシ</u> だ | <u>Nigihayami Kohaku Nushi</u> . | 音訳 |
- (テキストに記された下線は対照箇所を明示するために、筆者が加えたものである。)

表2. 『千と千尋の神隠し』の異文化要素訳出における翻訳方略

上のリストから異文化要素の訳出に採用された翻訳方略の集計結果は次のようになる。

音訳：3 詳述：0 直接訳：6 一般化：4 置き換え：10 注釈：1 省略：6

この結果を基に、次項では『千と千尋の神隠し』の英語字幕における異文化要素の訳出傾向について、標準化と国際化の概念を用いて考察する。

8. 考察

前述したように標準化とは、起点テキストが持つ特異性を低減したり、消去したりすることによって、目標文化において受容されやすいテキストにすることとされる。そこで、分析に使用した方略を、起点テキストの持つ特異性の低減という標準化の観点から捉えなおしてみる（採用されなかった詳述方略は除く）。

- 1) 音訳は英語字幕において起点テキストの要素がそのまま提示される方略であり、この方略の採用によって起点テキストが持つ特異性は低減されない。
- 2) 直接訳の方略では、起点テキストの異文化要素は「何も足されず、何も引かれない」(Pedersen, 2011, p. 83)。ゆえに起点、目標、どちらにも偏らない中間的な訳出となり、

起点テキストが有する特異性は低減されない。

- 3) 一般化は、起点テキストを同一カテゴリ内の一般的なもので提示する方略 (Pedersen, 2011, p. 85) であることから、起点テキストが持つ要素の一部は保持されている (くぐり戸→gate) が、完全には保持されない。
- 4) 置き換え方略では、起点テキストの要素が削除される場合がある。例えばジョークの翻訳において、笑うという動的等価 (dynamic equivalence) (Nida, 1964) を達成するために、起点テキストがまったく異なるテキストに置き換えられる場合である。そのため置き換え方略では、起点テキストの含意が保持されても言語的要素は削除される場合があるのだ。今回の分析では起点テキストが持つ要素を一部保持する置き換えのみが行われている (腹掛け→apron)。
- 5) 注釈とは、創作によって起点テキストと関連する新情報を付け加える方略である。新情報が追加されることによって、起点テキストの持つ特異性が保持されると同時に、起点テキストの意味がより明確化される。これはファンサブ (fansubs) における頭注 (headnote) (Pérez González, 2007, p. 71) と同じ役割を果たすと考えられる。
- 6) 省略は最も目標文化寄りの方略であり、起点テキストの中の特異性は削除される (Pedersen, 2011, p. 96)。

このように標準化の観点から各方略を見直すと、方略と標準化の関係が浮かび上がってくる。すなわち、起点テキストの特異性が低減され、標準化が行われるのは、一般化、置き換え、および省略の3方略が採用された場合だということである。したがって、これらの方略の採用頻度が高いほど、標準化が行われる字幕も多いと考えられる。今回の分析では、3方略の採用回数は20回と、全方略の採用回数(30)の67% (小数点第一位四捨五入) であったことから、抽出された異文化要素の訳出の半数以上で標準化が行われたと考えられる。

では、どのように標準化が行われたのか、その一部を事例から見て行こう。まず、「ヨモギ湯→fragrant bath」(一般化) という字幕では、「fragrant」という語によってヨモギが持つ香気性は保持されているものの、ヨモギが植物であるという要素は削除されている。日本におけるヨモギ湯をそのまま訳出するよりも、バラの花びらや香水を浴槽に入れることを連想する語のほうが適切であると考えた結果の選択かもしれない。次に、「腹掛け→apron」(置き換え) の字幕においては、腹掛けの持つ下着としての意味が削られ、エプロンに置き換えて訳出されている。台詞の時間が長く、文字数に余裕があれば、詳述や注釈などの訳出が試みられたケースかもしれない。さらに、「釜爺さんですか→Um, are you Kamaji?」(省略) の字幕にあるように、この作品では「～さん」の敬称は訳出されていない。英語圏において敬称が必要ではないと判断されたキャラクター同士の会話については敬称が削除され、標準化が行われたと推測される。一方、「～さま」に関しては「春日さま→Kasuga sama」(音訳)、「ハクさま→Master Haku」(直接訳) と、同じ敬称でも異なる訳出となっ

ているが、こうした選択にどのような要因が作用しているのかは興味深い点である。

このように標準化が行われる要因を、ローカリゼーションにおける国際化の概念を用いて説明することができると考える。国際化とは翻訳を含むローカリゼーションにおいて目標テキストの訳出を容易にするために中間バージョンを制作することである。海外マーケットを目指す日本映画にとっても、英語字幕は起点テキストと最終的な目標テキストをつなぐ中間バージョン、すなわち国際化と位置付けることができる。国際化は複数の目標テキストへの訳出を容易にするプロセスであるため、起点テキストが持つ「地域の差異を削ぎおとしたもの」(藤濤, 2013, p. 124)となるとされる。そのため、起点テキストの国際化である英語字幕においても、起点テキストに含まれる特異性や他者性を低減させる訳出になるのではないかと考えられる。

非英語映画では英語字幕を介して他言語への重訳が行われるケースがあるが(Díaz-Cintas & Remael, 2007, p. 38)、本稿が分析対象とした『千と千尋の神隠し』のUS版DVDにおいても重訳が行われた可能性がある。同DVDには音声選択(Audio Options)として英語、日本語、フランス語があり、また、字幕(Captions and Subtitles)については通常の英語字幕と聴覚障害者用の英語字幕が入っている。鑑賞にあたって日本語音声を選択した場合、タイトル画像はオリジナルのまま「千と千尋の神隠し」であるが、英語音声を選択すると、タイトル画像は「Spirited Away」となる。しかし、フランス語音声を選択した場合でも、タイトルは英語音声の時と同様に「Spirited Away」と表示されるのである。同作品のフランス国内における上映時のタイトルは「El Voyage de Chihiro」¹⁰と、今回のDVDのタイトルとは異なっている。このことからUS版DVDのフランス語訳は、アメリカにおいて英語から重訳されたテキストではないかと思われる。そうであるならば、同DVDの英語字幕(もしくは英語吹き替え)は、フランス語訳の制作を仲介するための国際化バージョンであるといえる。

9. 結語

本稿では日本映画における英語字幕の訳出傾向を探ることを目的として、『千と千尋の神隠し』に含まれる異文化要素の訳出における方略を分析し、その結果に基づいて標準化、国際化の観点から考察を行った。異文化要素の訳出に関しては、日本語を起点テキストとする訳出に適した方略分類を案出し、それを分析の枠組みとして使用した。その結果、同作品に含まれる異文化要素について、その半数以上で標準化された訳出が行われたことが認められた。また、英語字幕において標準化が行われる要因として、1) 英語字幕の視聴者が持つ言語的、文化的多様性、2) 起点主導の翻訳であるため、制作プロセスが訳出に作用すること、3) 英語字幕において、複数の目標テキストへの訳出を容易にする国際化が行われていること、が挙げられた。しかしながら、本研究が分析の対象としたのは日本映画1作品のみであり、

この結果をもって一般化することはできない。そのため今回得られた結論が他の作品にも適用できるかについては、対象を広げて分析する必要がある。また、標準化が英語字幕に特有な現象であるのかについても別途検証が必要であるが、それに関しては紙幅の関係上、稿を改めたい。最後に、本研究は英語字幕の訳出に関する起点文化側からの考察であるが、英語字幕の訳出に影響を与える要因は、字幕が受容される目標文化にも存在すると考えられる。したがって、目標文化に関する考察も必要となる。これらの点について研究を進めていくことが今後の課題である。

.....

【著者紹介】

篠原有子 (SHINOHARA Yuko) 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程在籍。フリーランス字幕翻訳者。専門分野は通訳翻訳学および字幕翻訳研究。

.....

【註】

1. 聴覚障害者用字幕 (SDH : subtitling for the deaf and the hard of hearing) では、セリフを文字で提示するだけでなく、弱者には聞き取れない音声の特徴の説明も加えられる。最近では技術の進歩により、音声認識システムによるリアルタイム字幕あるいはライブ字幕も制作されている (Pérez González, 2009, pp. 13-20)。
2. 『千と千尋の神隠し』のアメリカ版の制作にかかわったジョン・ラセター (John Lasseter) は、同作品のDVDの冒頭で、来日したときに英語字幕付きの同作品を見て感動したと述べている。これはおそらく、最終的なアメリカ版とは異なる仮の英語字幕を指すものと思われる。このことから、英語字幕はプロモーションにも使用されているのがわかる。『Shall we ダンス?』においてもフィルムマーケットへの出品とアメリカ公開では異なる英語字幕が使用されている。(周防, 2001, p. 20)
3. 翻訳方略とは「訳出作業における個別の問題に対応するための方法」と定義する。(篠原, 2013, p. 84 を参照)。
4. アルク(株)より2014年3月4日情報取得。
5. 第67回カンヌ国際映画祭に関する情報は以下より取得。[Online] <http://www.movieplus.jp/fes/cannes2014/nominate/> (2014年7月28日) <http://aw5656.blog.so-net.ne.jp/2014-05-23>
6. それとは対照的に、日本のアニメ(anime)やドラマにファンが自分たちで字幕をつけるファンサブ(fansubs)については、その形態や特徴に関して海外で様々な研究がなされている(Caffrey, 2009; O'Hagan, 2003; Pérez González, 2007 など)。
7. 重訳(indirect / relay translation)を再翻訳、間接翻訳、補助翻訳と区別する論考もある。詳細はSt André(2009, p. 230)を参照されたい。
8. IMDbリリース情報。[Online] <http://www.imdb.com/title/tt0245429/releaseinfo> (2014

年7月28日)

9. スタジオジブリへの取材により確認 (2014年10月3日)。

10. IMDbリリース情報。[Online] (2014年7月29日)

【参考文献】

- Aixelá, J. F. (1996). Culture specific items in translation. In R. Alvarez & M. Carmen-Africa Vidal (Eds.), *Translation, Power, Subversion* (pp. 52-78). Clevedon: Multilingual Matters.
- Baker, M. (1993). Corpus linguistics and translation studies: implications and applications, In Baker, M., Francis, G. and Togni-Bonelli, E. (Eds.). *Text and Technology: In honour of John Sinclair* (pp. 233-250). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- (1996). Corpus-based translation studies: the challenges that lie ahead. In Somers, H. (Ed.) *Terminology, LSP and Translation. Studies in language engineering in honour of Juan C. Sager* (pp. 175-186). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Berlinale Journal. (2014). *Internationale Filmfestspiele Berlin. The complete festival programme*. Berlin: Runze & Casper Werbeagentur GmbH.
- Caffrey, C. (2009). *Relevant abuse? Investigating the effects of an abusive subtitling procedure on the perception of TV anime using eye tracker and questionnaire* (Doctoral dissertation). Retrieved from DORAS.
- Díaz-Cintas, J. (2009). Introduction - audiovisual translation: an overview of its potential. In Díaz Cintas, J. (Ed.), *New trends in audiovisual translation* (pp. 1-18). Bristol, New York, Ontario: Multilingual Matters.
- Díaz-Cintas, J. & Remael, A. (2007). *Audiovisual Translation: Subtitling*. Manchester & Kinderhook: St. Jerome.
- Gartzonika, O. & Serban, A. (2009). Greek soldiers on the screen: politeness, fluency and audience design in subtitling. In Díaz-Cintas, J. (Ed.), *New Trends in Audiovisual Translation* (pp. 239-250). Bristol: Multilingual Matters.
- Grigaraviciute, I. & Gottlieb, H. (1999). Danish voices, Lithuanian voice-over. The mechanics of non-synchronous translation. *Perspectives - Studies in Translatology*, 7 (1), 41-80.
- IMDb releaseinfo [Online] <http://www.imdb.com/title/tt0245429/releaseinfo> (2014年7月28日)
- John Benjamins Translation Studies Bibliography. [Online] <https://www.benjamins.com/online/tsb/> (2014年7月28日)
- Katan, D. (2004). *Translating cultures: An introduction for translators, interpreters and mediators*. Manchester, UK & Northampton: St. Jerome.
- Kenny, D. (2001). *Lexis and Creativity in Translation. A corpus-based study*. Manchester: St Jerome.

- Lu, C. (2010). *Analysis of English subtitles produced for the Taiwanese movie Cape No. 7* (Master's thesis). Retrieved from AUT Library.
- Morris, J. (2009). *An investigation into subtitling in French and Spanish heritage cinema* (Master's thesis). Retrieved from eTheses Repository.
- Nida, E. A. (1964). *Toward a science of translating*. Leiden: E. J. Brill.
- O'Hagan, M. (2003). *Middle earth poses challenges to Japanese subtitling*. [Online] <http://www.translationdirectory.com/article441.htm> (2013年6月23日)
- Palleta, A. (2012, October. 3). Lost in translation, found in subtitles. [Online] <http://online.wsj.com/article/SB10000872396390444592404578033301429532328.html> (2012年11月5日)
- Pedersen, J. (2011). *Subtitling Norms for Television*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Pérez González, L. (2007). Intervention in new amateur subtitling cultures: a multimodal account. *Linguistica Anterpensia*. 6, 67-79.
- (2009). Audiovisual translation. In Baker, M. & Saldanha, G. (Eds.), *Routledge encyclopedia of translation studies* (2nd ed) (pp. 13-20). London & New York: Routledge.
- St André, J. (2009). Relay. In Baker, M. & Saldanha, G. (Eds.), *Routledge encyclopedia of translation studies* (2nd ed.) (pp. 230-232). London & New York: Routledge.
- Toury, G. (1995). *Descriptive Translation Studies and beyond*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- WordPress.com (2007, September 30). Localization, Globalization, Internationalization and Translation. [Online] <http://110n.wordpress.com/> (2014年12月16日)
- Zilberdik, N.J. (2004). Relay translation in subtitling. *Perspectives. Studies in Translatology* 12 (1), 31-55.
- 朝日新聞 Globe (2010年2月22日) 「日本映画というワンダーランド」
- 朝日新聞 (2012年1月16日朝刊) 「洋画じわり字幕離れ」
- フィールドワークス (2008). 『映画・映像業界大研究』産学社.
- 藤濤文子 (監修・編訳) (2013) 『翻訳研究のキーワード』研究社.
- 井上逸兵 (1999) 「井上逸兵のしましまにしまっしま! (2) トトロとTOTOROに見る日本とアメリカ メイとサツキはアメリカ人?」『NEWTTYPE』1999年2月号[Online] <http://homepage3.nifty.com/ipinoue/shimashima9902.htm> (2014年12月16日)
- 海外映画輸入配給協会 (作品目録) . [Online] http://www.gaihai.jp/f_film_list.htm (2014年7月10日)
- 掛尾良夫 (編) (2009) 『日本映画の国際ビジネス～世界で勝つために知っておきたいコト～』キネマ旬報社.
- マンデイ, J. (2009) 『翻訳学入門』(鳥飼玖美子・監訳). みすず書房. [原著: Munday, J.]

(2008). *Introducing Translation Studies*. New York: Routledge].

日本映画制作者連盟 (2013) 「映画輸出実績 2011」(2013年12月11日情報取得) .

ピム, A. (2010) 『翻訳理論の探求』(武田珂代子・訳). みすず書房. [原著:Pym. A, (2010). *Exploring Translation Theories*. London & New York: Routledge].

篠原有子 (2011) 『映画字幕における翻訳行為』立教大学大学院修士論文[未刊行].

—— (2013) 「映画『おくりびと』の英語字幕における異文化要素(日本的有標性)の翻訳方略に関する考察」『翻訳研究への招待』第9号 [Online] <http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/archive.html> (2014年7月14日)

周防正行 (2001) 『「Shall we ダンス？」アメリカに行く』文藝春秋.

田中純一郎 (1976) 『日本映画発達史』中央公論社.

矢田陽子 (2013) 「言語表象文化と翻訳～『たそがれ清兵衛』英語・スペイン語映像翻訳の記号学的考察～」『Media, English and Communication』No.3, 65-78頁. [Online] <http://www.james.or.jp/contents/gakkaisi/> (2014年3月20日)

山田健太郎 (2004) 「英語版アニメ作品に見る翻訳の問題：『千と千尋の神隠し』の場合」『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』第5号, 195-205頁.

膳所美紀 (映画翻訳家協会・編) (2011) 『字幕翻訳者が選ぶオールタイム外国映画ベストテン』AC Books.

【分析資料】

『千と千尋の神隠し (Spirited Away)』(英語字幕版) (2001) 制作販売・Buena Vista Home Entertainment (USA).